

VE 実践論文

応募原稿執筆要領

1. 章節等による構成

章や節、項等で本文を構成し、それらには“1”や“1.1”、“1.1.1”といった見出し番号とタイトルを付ける。

2. 論文の表現

常用漢字や新かなづかい、平易な口語体で表現する。ただし、専門用語については常用漢字に限らなくても良い。副詞や接続詞、連体詞は、原則としてひらがなとする【例：たとえば、しばらく、また、したがって、その、…】。

3. 数字の書き方

原則としてアラビア数字を使用し、三桁ごとにコンマ(,)を付ける。成語や慣用語、固有名詞、数量的意味合いの薄いもの【例：一般的、第三者、…】については漢字とするが、19世紀や第1四半期等は例外とする。

4. 記号の使い方（記号も1文字とする）

- (1) 句点(。)と読点(、)を使用する。コンマ(,)とピリオド(.)は、内容に応じて使用する。
- (2) 中グロ(・)は、多用すると目立ちすぎるので、名詞並列の時等に限定して使用する。欧文略字には、中グロでなくピリオドを使用する【例：J.M.Keynes 等】。ただし、一般的な慣例でピリオドを入れないものもある【例：EC、OECD等】。
- (3) 引用文には「」を使用し、クォーテーションマーク(“ ”)は欧文引用の時に限って使用する。
- (4) 二重ヒッカケ(『 』)は、書名や重引用符に使用する。
- (5) 専門用語や固有名詞等の原綴りは、()で括った中に欧文で記す。必要な時は[]や[]を使用しても良い。

5. 人名の表現

原則として原語で記す。ただし、広く知られているものや印字が困難なものについては、この限りでない。

6. 数式と記号

- (1) 数式は、原則として2行とって別に記し、末尾に通し番号を付ける。
- (2) 文中で使用する時は、特殊な記号でなく、“ a/b ”や“ $\exp(a/b)$ ”等といった記し方をする。

- (3) **C、P、W** 等、大文字と小文字の字形が同じものや、**0 (ゼロ) と O (オー)、1 (イチ) と I (アイ)、2 (ニ) と Z (ゼット)** 等、字形が似ているものははっきりと区別する。また、**ギリシャ文字の α (アルファ)、γ (ガンマ)、χ (カイ)、κ (カツバ)、ω (オメガ) とアルファベットの a (エイ)、r (アール)、x (エックス)、k (ケイ)、w (ダブリュ)** もはっきりと区別し、これらの区別方法は欄外等に明記する。

7. 図表と写真

本文と図表・写真の間は、1行空ける。図表と写真が続く場合でも、その間は1行空ける。

8. 文章・キーワードの強調

論文とは図表を含む全てが読まれることを前提に執筆されるもので、一部分の視覚的強調はしないというのが一般的であるため、アンダーラインやゴシック体等による**文章・キーワードの視覚的強調はしない。**

9. “注”の表記

“注”を使用した時は、通し番号を付け、本文中の該当箇所にその番号を記す。たとえば**(注1)**というように記し、その注釈文を本文の最後にまとめて書く。

10. 引用文献と参考文献

- (1) 他の刊行物から文章や図表等を引用した時は、**(注)**で引用文献を明らかにする。
- (2) 本文中に引用した時には、その右肩に片括弧) を付けて、引用番号を付ける。
- (3) 引用文献、次に参考文献と、各々に通し番号を付けて本文の最後にまとめて記す。
- (4) **参考文献には参考の度合いが高いものを記す。新聞の記事等は参考文献に該当しない。著者自身の論文を参考文献として記載する場合は、5編以内を目安とする。**
- (5) 引用文献は(注)の番号順、参考文献は著者(共著の場合は第1著者)の姓のアルファベット順(欧文・和文の区別なく)に記す。引用文献及び参考文献の記載方法は次の通り。

a. 雑誌の場合

番号) 著者名 : 論文題名、雑誌名(欧文の場合はイタリック体)、巻数(号数)、ページ、発行所名、発行年(西暦)

b. 著書の場合

番号) 著者名 : 書名(欧文の場合はイタリック体)、ページ、発行所名、発行年(西暦)